

親、兄弟姉妹を大切にしない、家族を大切にしない、友人を大切にしない、隣近所の人たちを大切にしない、学校の友だちを大切にしない、仕事の仲間を大切にしない、…どれも一つとっても簡単だといえる人もあれば、どれも簡単なようで難しいときもある、いやいや、難しいばかりで疲れるばかりだ、いやとてもそんなこと決してできない、…親、家族、友人たち、隣近所の人たち、学校、職場の同僚たち、そして教会で出会ったひとたち、…こういうひとたちを隣人と呼んで差し支えないでしょう。

それでは、あなたに敵対する人々を憎めと言われれば、
「よひひてしよひな。」

レビ 19・17 心の中で兄弟を憎んではならない。同胞を率直に戒めなさい。そうすれば彼の罪を負うことはない。18 復讐してはならない。民の人々に恨みを抱いてはならない。自分自身を愛するように隣人を愛しなさい。わたしは主である。

しかし他方では、

申 21・18 ある人にわがままで、反抗する息子が
あり、父の言うことも母の言うことも聞かず、戒め
ても聞き従わないならば、19 両親は彼を取り押さ
え、その地域の城門にいる町の長老のもとに突き出
して、20 町の長老に、「わたしたちのこの息子はわ
がままで、反抗し、わたしたちの言うことを聞きま

せん。放蕩にふけり、大酒飲みです」と言いなさい。
21 町の住民は皆で石を投げつけて彼を殺す。あな
たはこうして、あなたの中から悪を取り除かねばな
らない。全イスラエルはこのことを聞いて、恐れを
抱くであろう。

古代のイスラエルに限らず、国家、会社、学校、人間の集まりであれ、法や規則をもつ組織には、人が守るべき規定があり、それに反する行為については罰則の規定があります。

それは犯してしまった罪、それによって破壊された有形、無形のもの、かけがえのない価値あるなものかに対して、復元させるべきである、あるいは代償としておなじ対価を償わなければならないという損害補償・賠償の掟なのです。

もしも加害者が被害者の精神的に崇高なもの、人間の信頼、尊厳を損なったならば、それによって生じた被害者の屈辱、恨みを、完全に払拭させるために必要な、ありとあらゆる物的、精神的な代償をもって、加害者は償わなければならないのです。

また加害者が、被害者が所有する物的に価値あるもの他人の財貨を盗む、物を破壊したならば、等価の金品、そして精神的な被害を上乗せして埋め合わせる償いをしなければならぬのです。

このような罰則規定には、軽いものから極刑までありますが、極刑以前の規定は加害者によって損なわれた被害者との関係を回復するための規定です。しかし、回復の見込みがないとみなされた場合、加害者は極刑に処されます。

このような法体系は、福音書の時代、さらに旧約聖書の時代にまでさかのぼります。ユダヤの律法についてイエスは…

43 「あなたがたも聞いておるとおり、『隣人を愛し、敵を憎め』と命じられている。」

「あなたがたも聞いておるとおり、『目には目を、歯には歯を』と命じられている。(38節)は、出エジプト記21章にある損害賠償に関する規定です。この法は、ハムラビ法典に影響を受けて書かれたものだとされます。ハムラビ法典を書き記した古バビロニアのハムラビ王は、この法律の目的を…

旧約聖書の律法はいうまでもなく異国での奴隷、国が滅びる屈辱を経験したユダヤ民族が平和を維持するために必要な法であります。しかしイエスは、その法を無視するかのよつに、教えを説かれます。

44 しかし、わたしは言っておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。

「敵を愛しなさい、迫害する者のために祈りなさい」と命じられるのです。あらためてわたしたちは「愛する」という言葉の意味を問わなければなりません。気心の知れた仲のよい家族、友人を愛する以上に、敵を愛する時にこそ、愛が真に愛となることを知らされます。

またわたしたちは愛について誤解してはいけないともあきり

かにされます。愛するとは、好きになることではないとい
うことです。

さらにわたしたちは祈りについて、自らの浅はかな思い
込みの壁を打ち崩されます。祈りとは、自分のため、家族の
ため、友人のため、教会員のために祈るものだという思い込
みです。しかしイエスは、迫害する者のために祈れと命じら
れるのです。

45 あなたがたの天の父の子となるためである。父
は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正
しくない者にも雨を降らせてくださるからである。

46 自分を愛してくれる人を愛したところで、あな
たがたにどんな報いがあるのか。徴税人でも、同じ
ことをしているではないか。47 自分の兄弟にだけ
挨拶したところで、どんな優れたことをしたことにな
ろうか。異邦人でさえ、同じことをしているでは
ないか。

そついつ思い込み打ち壊すのは、イエスによれば、わたし
たちが神の子となるためなのです。神は邪悪な人に対して
も必要なものを与えられます。また邪悪な者でさえ、
自分を愛する者を愛するのです。家族や仲間、友人と親密に
つきあったところで、そのようなことは信仰ある者として、
特に賞賛するべきでも何でもないのです。

むしろわたしたちが克服すべき問題は、自らが被害者の
立場に立った時にあまりかになるのです。そのときわたし
たちの心にはある決まり文句が鳴り響きます「隣人を愛し、
敵を憎め」と。その言葉に駆り立てられて敵である加害者に

憎しみをぶつけて、恨みを晴らす、極刑をも厭わないとい
法の理解に立っているならば、…まして日常の過ぎ去り行
く出来事において「些末だが不快な仕打ちには、恨みを晴
らし、面子を保つ」ことに終始しているならば、わたしたち
は、何か大いなる成長の道を自ら閉ざすことになるのです。

報復により、人間は、神に与えられた、隠されてはいるが
完成させるべき美しい旋律を、願いもしていないのに、旋律
を壊してしまうのです。編曲を試みて、美しく晴れ晴れとし
たあかるい歌にしようとしたのに、聞き終わった後になん
とも形容しがたい禍根が残っていることに気がつく、しか
しそれがどこにあるのかもわからないのです。

「48 だから、あなたがたの天の父が完全であられ
るように、あなたがたも完全な者となりなさい。」

「完全な者」というこの言葉は、成長しきった者、徳におい
て完成された者とも訳せます。報復と復讐の道から決別し
徳において完成された者となりなさいとイエスは命じられ
るのです。

報復と復讐の道を、当然のこととして、つまり無思慮に歩
む人が、きわめて多い中で、「敵を愛し、迫害する者のために
祈り」はじめるやいなや、わたしたちは絶えきれないとしか
思えないような内的な闘いの扉を開けて歩み始め、胸が張
り裂けそうな苦痛に顔をゆがませ唇をかみしめながら、苦
悩にさいなまれるでしょう。なぜなら「隣人を愛し、敵を憎
め」という戒めにおいて外に向けるべき、報復と復讐の力を
内に封じるからなのです。

しかしこの道は「和解の道」なのです。そしてこの道は、
完全に孤独であり、だれひとりとしていっしょに歩
めません。

ただひとり、例外的な方を除いて…。